

[書評]

宣教の神学としてのバルト神学：*The Witness of God, The Trinity, Missio Dei*, Karl Barth, and the Nature of Christian Community, by John G. Flett

Published 2010 by Wm. B. Eerdmans Publishing Co.

佐藤 司郎

1. バルト没45年、時代も大きく変わり、新たな問題の出現と共に教会の諸課題もその重心を少しずつ移しつつある中、バルト研究も変化をみせはじめている。近年ドイツ語圏以外、とり分け米英を中心とした英語圏のバルト研究が以前にまして活発になっていることは、おおかたの知るところである。それは従来の主流派教会だけでなく福音派と言われる陣営においても見られる（栗林輝夫『現代神学の最前線』2004年）。多岐にわたる研究動向を精確に分析することは、今の私の手には余ることだが、一般に、その方法論や関心の違いはあるものの、教会の実践的関心に基づく諸研究、とり分け、キリスト教倫理、宣教論、それとのからみで教会論に関連する研究書の多いことは、一つの顕著な傾向として指摘できるであろう。

2. 今夏読んで、刺激を受け、ここに簡単に紹介するのも、まさに宣教論に関わる最近のバルト研究の一冊である。書名は『神の証し』であり、副題にある *Missio Dei*（神の派遣、神の宣教）のみがイタリック体で表記されているように、宣教の神学、とくにミシオ・デイに関連したモノグラフである。

ミシオ・デイとは、言うまでもなく、宣教をほかならぬ神の、すなわち、三一の神の活動であることを強調し、そこに宣教の基礎と動機づけを求める、1950年代以降、エキュメニカル運動の中ではじまり、主流派プロテスタントから、オーソドクス、多くの福音派、さらにカトリック（第二バチカン公会議のいくつかの文書に見られるとデイヴィッド・ボッ

シュは指摘する)にまで広がった現代のもっとも有力な宣教論である。本書はしかし、そうしたミシオ・デイ神学の歴史や、現在の動向をレポートするだけのものではない。そうではなくて、ミシオ・デイの神学を、とくにバルトとの関連で明らかにしようとする、きわめて意欲的な研究である。

ミシオ・デイの宣教論がIMC(国際宣教協議会=1910年のエジンバラでの世界宣教会議の後継会議)のヴィリンゲン大会(1952年)で最初に明確に現われたこと、そしてそれに、カール・ハルテンシュタイン(当時、バーゼル・ミッションの幹事)を介して、バルトの1932年の講演「現代における神学と宣教」(ZZ,1932)が大きく影響したという見解のあることは知っていた。たとえば先に名前を挙げた宣教論の大家ポッシュもこう書いている、「1932年のブランデンブルク宣教会議で発表された論文の中で〔現代における神学と宣教〕、カール・バルトは、宣教が神ご自身の活動であることを明瞭に語る最初の神学者となった」(『宣教のパラダイム転換』下233頁)。しかし本書で著者フレットはこれは誤りであることを明らかにする。むしろその後のミシオ・デイの神学がバルトの影響を受けたことは間違いない。しかし著者によれば、弁証法神学に見られた、神の活動と人間の活動、あるいは教会と宣教のあいだの二元的な思考がミシオ・デイに誤った問題意識を植えつけたと論じる。これだけでも注目に値いするけれども、ここまでなら私の驚きもたかが知れていたと思う。著者がその上で、バルト神学そのものを、あらためてミシオ・デイの神学として再解釈し、これをてこにしてミシオ・デイ神学を再論し、自らの宣教論の新たな構築を試みようとしていることは刺激的なことであったし(第1章)、感銘と共感もおぼえた。

3. 著者について本書のPrefaceや他の箇所書かれている以上のことは知らない。1972年生まれで、ダレル・ゲーダー(宣教論の視点からバルトを読み解いているプリンストン神学大学の高名な研究者)のもとで育った新しい世代の研究者である。ゲーダーのほかに、同じプリンストンのB.マコーマック、さらにD.ミグリオールに対しても謝辞を述べている。学位取得後は、ソウルのキリスト教大学や神学校で宣教学を講じ、少なくとも本書が出版された頃は、ブッパータールで研究に従事していた。なお本書はフレットの最初の出版物である。

4. 以下、目次を紹介し、要点に触れたあとで、最後に彼自身の立場について私見を含めて言及したい(原文イタリック体の部分は傍点で示す)。

序言

- 第1章 導入 (神の問題／ミシオ・デイ：教会と宣教の問題への答えにおける神の問題／バルトとミシオ・デイの起源／三一論的提議)
- 第2章 ミシオ・デイの問題 (導入／宣教の神による派遣／神の国への方向づけ／教会のまさに本性による宣教／ミシオ・デイの問題)
- 第3章 ドイツの宣教団体と弁証法神学 1928-1933 (導入／帝国主義とキリスト教化／弁証法神学の宣教への受容／「神学と現代における宣教」／ジークフリート・クナックと宣教活動への受容)
- 第4章 IMC ヴィリンゲン宣教会議 1952年を巡って (導入／カール・ハルテンシュタイン：ミシオ・デイ発案者／北米のレポート：「なぜミッションか？」／ヴィリンゲン 1952年／ミシオ・デイ神学の相反する諸形式)
- 第5章 宣教活動の脈絡 (導入／ミッションの基礎／神は神，被造物は被造物である／宣教活動の目的)
- 第6章 三一の神は宣教の神である (導入／ご自身において，またご自身のためにいます神は宣教の神である／独り子の単一性／聖霊の証し)
- 第7章 証しへの召命 (導入／預言者イエス・キリスト／聖霊の約束における生命／使徒的共同体／神への奉仕に生きること，教会はこの奉仕のために遣わされている)
- 第8章 ミシオ・デイ再訪 (ミシオ・デイの問題／ミシオ・デイ再訪)

著者は「序言」で、きわめて異例なことだと思われるが、『教会教義学』(KD)の英訳(CD)が、とくに宣教に関わる部分において、もとのテキストのニュアンスを正確に伝え切れていないことの苦情を述べることから始めている。具体的な指摘はここで取り上げることはしないが、そのためもあってKDの頁数をつねに併記しており、これはわれわれには便利である。

本書は、序言と第1章を除けば、大きく二つに分かれる。前半、第2章～第4章で、ミシオ・デイを巡る歴史的諸問題が取り上げられる。後半、第5章～第7章で、宣教を巡る組織的諸問題が取り上げられる。前者では、各章のはじめにバルトのテキストがつけられ、それを導きとして諸問題、諸連関の組織神学的な解明がなされている。ここはバルト神学をミシオ・デイの神学として再解釈するための成否を握る重要な部分だが、この紹介では取り上げることはできない。

最後の第8章が、本書全体の結びに当たる。標題（ミシオ・デイ再訪）からもうかがい知ることができるように従来のミシオ・デイ神学を批判的に再構成し、彼自身の新たなミッシヨナリー・ゴッド、ミッシヨナリー・チャーチ（コミュニティ）論をスケッチしている。キーワードは、活ける神（The Living God）、この部分は、この紹介でも最後に少し詳しく取り上げることになる。

5. 本書前半ではまず第3章が興味深い。ここで著者は、1928～1933年までのドイツの宣教団体とバルトとの関係を追っている。目的は1932年の前掲のバルトの講演をどのように読むかという、いわばコンテクストの確認である。1928年とはIMCのエルサレム大会があった年であり、1933年は言うまでもなくヒトラー政権が誕生した年である。周知のようにこの時期までのバルトはエキュメニカル運動にはきわめて批判的・否定的な対応をとっていた。エルサレム会議についても同様であった。エルサレム会議ではドイツの代表団はバルトの線に立とうとしたようだが、その後ドイツ教会の民族主義的な動きの中で弁証法神学の立場は受け入れられることにはならなかった。バルトの1932年講演も「肯定的にせよ否定的にせよ」（p.79）受容されなかった。じっさいバルトが当時闘っていたのは自然神学であって（1934年のバルト＝ブルンナー論争、参照せよ。p.170-172）、宣教に対するバルトの鋭い神学的な問い返しに、当時理解を示し接続する宣教論も団体も少数の例外を除いて存在しなかった（バルト＝クナックの論戦[ZZ,1932], p.112-120。E. ベートゲ『ボンヘッファー伝』2, 11頁他、参照せよ）。

フレットは当時の宣教団体と宣教論のコンテクストを確認した後で、バルト講演を丁寧に分析している。その結論は、「バルトの1932年の講演は宣教を三一の神に基礎づけてはいない。彼が神の主体性を強調するのは彼の教理理解の直接の帰結であって、三一の神の宣教的経綸を展開しているわけではない」。1952年のヴィリンゲン大会は、なるほど宣教を最終的に三一の神に基礎づけることをしたが、創造と文化とを、宣教にとって中心的なものとして主張し、そのかぎり、たんにキリスト論的ではなく、それはバルトの立場とははっきり異なるものであった。

バルトの上記講演とミシオ・デイとの歴史的・内容的関連が見いだせないとなれば、ヴィリンゲンで示された、宣教を三一の神に基礎づけることのオリジンはどこにあったのか、第4章はその問題と取り組む。従来説はハルテンシュタインが1932年のバルトの立場を持ち込んだというものであったが、それは——なるほど *Misso Dei* の用語は彼に帰せられるし（1934年）、早くからそうした考えをもっていたことも認められるが（p.131）——正確ではない。むしろフレットは、先行研究に基づきながら、ヴィリンゲンに提出された二

つのレポートの一つである北米教会の準備文書 (Why Missions?) にそれを見出し (ポール・レーマン, リチャード・ニーバーらの指導による), 詳細に分析している。そこに, バルトのキリスト論的集中の狭さを批判しつつ宣教を三一の神へと基礎づける新たなはっきりした萌芽を見出す。

6. さて結びに当たる部分を見ておこう。三一の神ご自身に宣教の基礎を置くのが, もっとも広い意味でのミシオ・デイだとすれば, フレットは弁証法神学の影響下にあった時代から今日までミシオ・デイは「同じ欠点をもった三一論」(p. 287), すなわち, 「宣教の行為が, 神の存在と行為の分裂の上に基づいている」(同) ことを批判し, ここでむしろバルトに学びつつ, 神の本質と行為の分離を克服した神理解を「活ける神」としてとらえ, 宣教の真の基礎と動機はそこにしかありえないとして新たなミシオ・デイを構想しようとする。神はミSSIONナリー・ゴッドなのである (フレットは, 三位一体的神学の起源の少なくとも一つに, 極めて単純に一つの宣教の神学 [Missionstheologie] があったというバルトの洗礼論での発言なども引いて論じている)。従来ミシオ・デイには 19 世紀の植民地主義的な教会の宣教への批判的含意があり, 教会の活動の位置づけが積極的になされなくなったうらみがあった。しかしフレットはそう考えない——すでに彼は第 2 章で, ミシオ・デイ神学を構築する三つの要素のうちの第三として, 教会自身の本性からのミSSIONナリーということを語っていた (なお第一の要素はミSSIONナリー・ゴッドによる派遣, 第二は, 神の国への方向づけ)。「神のMISSIONは…コミュニティ (各個教会) の応答を, 神の行為の完成の直接的帰結として含む。クリスチャン・コミュニティは必然的にミSSIONナリー・コミュニティである。なぜなら, 世に対する意図的な運動におけるこの表情豊かな存在は, 永遠から永遠にわたって神ご自身の存在に帰属するまさに神と人間の交わりの本性であるからである。クリスチャン・コミュニティはミSSIONナリー・コミュニティである。というのも, もしそうでないなら, それは神の和解のコミュニティではないからである」(p. 290)。フレットはこれを聖霊の働きのもとにとらえる。その上で教会が「世のための教会」であり, 「和解の教会」であることを, バルトの和解論 (とくに第三部の教会論の言葉を引きながら明らかにしている。この終章の最後に, 著者は, Joy という項目を置き, それに触れながら, 次のように書いている, 「喜び (Joy) が宣教の活動の水源である。…証し, 交わり, そして喜びは同じ一つの全体に属する (ヨハネ一, 1:1~5)。MISSIONとは, 永遠から永遠にわたる神の命であるまさにその栄光に生き生きとあずかることの豊かな交わりである。それ [MISSION] は, 神は世のためにも死なれたとの生き生きした知識をもって世に連帯しつつ出て行く和解のコミュニティの命である。それ

〔ミッション〕は、屠られた小羊、活ける栄光の主の行列に加えられた囚人としてわれわれが聖霊の導きに従いつつなされる頌栄の応答である」(p. 298)。これが本書全体の結びの言葉である。

7. バルトを宣教の神学として読む試みに、いささか虚を突かれた感じがしないわけではなかったが、考えるまでもなく、説教の神学から出発し、宣教の自己吟味として神学を展開したバルトに、そういう視点から近づくことは、当然のことであった。バルトで信仰に導かれた人も多い。バルト神学はまさに宣教の神学だった。その意味で若い神学者ジョン・フレットの試みはわれわれに大きな刺激を与えるものである。こうした視点から見れば、とくに和解論第三部の教会論「世のための教会」なども、神の派遣・宣教の徹底した姿として理解が容易になるように思われる。フレットが掉尾に記しているように、神は世のためにも死なれたとの生き生きした知識をもって世に連帯しつつ出て行く和解のコミュニティ、これが世のための教会である。

その上でしかし、本書にバルメン神学宣言(1934年)への言及が一切ないことは、少し気になった。というのも、バルメンこそは、バルトの教会論、ひいては宣教論の不可欠のテキストだと評者は考えるからである。戦後、1947年、カール・バルトは、バルメン神学宣言第六項(宣教の課題を語ったテーゼ)に関連して、次のように語った、「教会が逃げないのは、教会が決してどのような点でも、自分自身のために存在するのではなくて、神の自由な恵みの使信のために存在するからである。この使信をたずさえて、教会は全世界に赴く。しかしさらに、教会は、この使信をたずさえて、またこの使信のために、この使信の具体化と明確化のために、救援活動や(望むらくは賢明で勇気ある!)政治的決断という形でも、全世界に赴くのである」(「神の自由な恵みの使信」)。これがバルメン第六項の含意だとすれば、こうした広がりにおいて宣教をとらえることは、フレットの研究とどのように切り結ぶのだろうか。むろんこれはフレットへの問いというより、われわれに残された課題であるに違いない。

(2013年9月11日)